

紹介

浅見和彦著

『日本文学気まま旅』

その先の小さな名所へ』

本 田 逸 朗

本書は著者である浅見和彦氏が平成二十年から二十七年まで、日刊建設工業新聞紙上において「文学気まま旅」と題して連載された一連の文章を一冊にまとめたものである。

全五十五回、日本全国を巡る旅の記録であり、その場所に深い関わりを持つ文学作品を縦横に引用しながら、各地の名所旧跡が語られる。

掲載された日刊建設工業新聞は建設・経済等に関連する記事が多く並ぶ。そのような硬質な記事の中に混じって極めて文学的な文章が載ることは一件アンバランスに映るかもしれない。しかしながら、大雑把な理系や文系の区分で言えば対極の位置にあるところにも文学が必要とされているのだということが窺える。ビジネスの世界に生きる人達にとつて、この連載は一服の清涼剤となったのではないだろうか。

そのように、連載に紙面を割いた編集方針や、数年に渡り受け入れた購読者が多く存し、文学需要の土壌があるということに嬉しさを覚えるものである。

では、本書の内容を紹介していきたい。

新聞連載の形なので、一回一回は短い。どの回ももっと読みたいと思わせられるが、その分數多くの地を取り上げることができているし、目当てとする場所、興味のある回をすぐに読み始めることも容易にしてくれている。そして言及される地は全国四十七都道府県全てに及び、海外にまでも目が向けられている。また、京都府が一・三十四・三十九回の三回分、岩手県が一・三十八回の二回分、海外であるモンゴルが五十二・五十五回の四回分と連載が複数回あてられている。また、三十七回「七里の渡し」は愛知県と三重県に跨っているの、それぞれ一・五回分とでもなるか。

序文に「日本は古来、旅好きの民族である。平安時代、鎌倉時代、江戸時代、あまたの旅行記が綴られている。その国民性は現代にまでつながる」とある通り、本書も著者の姿勢も、古来からの日本文学の系譜に連なるものである。

日本文学と旅と言うと、すぐに想起されるのは『土佐日記』のような紀行文学であろうが、本書は時代を下つて江戸時代の名所図会のような構成をとっている。名所図会はその場所の由来を説明して、関連する和歌等の作品が引かれ、図版が添えられるところもある。もともと、解説と引用に比重を置く名所図会とは異なり、本書は著者の体験や実感が織り込まれた文が綴られており、読む者に一層の親しみを感じさせる。また、かつては版木に彫られて添えられた各所の絵は、今では写真となつて付されている。それもほとんどは著者が自ら撮影したものだ。いずれの回でも必ずその地の写真が一点以上入っており、数多く撮影された写真から選抜されたものが使

用されている。どれもその場所の雰囲気がよく伝わってくる写真である。

それら全ての回について詳説するには紙数が足りないもので、複数回にわたって取り上げられた都道府県に焦点を当てて述べていく。

これらの地は著者の関心高いところであり、適当に回が割り振られたものではないことが窺えるからである。

先に記したように、京都府には三回分が割かれ、宇治川、平安京、下鴨神社の三か所が紹介されている。京都は古くから時の天皇が住まい、鮮やかな王朝文化が開いた地であった。多くの文学作品も著され、関連する史跡も多い。中世文学研究者である著者が注目するのも当然と言えよう。宇治川は第一回に据えられ、日本文学の代表とも言える『源氏物語』と絡めて述べられる。宇治や宇治川を舞台とするものは色々に思い浮かべられもしようが、京都と『源氏物語』を第一回に持ってきたことは、連載及び本書の入り口として王道を外さず堂々としたものである。そして三十四回・四十一回の平安京と下鴨神社は鴨長明と関連する地として述べられる。長明の代表作である『方丈記』には都を襲った災害の様子が克明に記されているし、下鴨神社は長明出生の地であり、年老いて後、隠遁して住んだ方丈庵の復元も境内で見ることができる。長明は著者が関心を寄せるような大なる人物であり、幾本もの研究論文があり、大学における講義でもしばしば取り上げられている。また、著者は先に長明の説話集『発心集』を伊藤玉美氏と共に角川ソフィア文庫から出版し、同様に『方丈記』も詳細な解説と訳文を付してちくま学芸

文庫から上梓している。そのような第一人者が、平安京と下鴨神社を選んだのは頷かれるところであろう。

次に、岩手県で取り上げられた二か所は平泉と高田松原である。

著者は東北の地にも強い関心を抱いている。これは岩波書店から『東国文学史序説』という大部の書が刊行されており、その中には『古事談』と奥州平泉』という論考が収載されていることとも関わる。平泉は奥州藤原氏の治める地であり、その頃の発展の様子が述べられる。また、源義経の終焉の地でもあり、『義経記』の引用より義経最後の場面を見ることができ、高田松原は東日本大震災で津波の被害大であった。ここでは吉村昭を引き、津波の恐ろしさとかつての松原の美しさを述べ、各メディアにもしばしば取り上げられた「奇跡の一本松」に焦点を当てられる。文学研究は現代社会の出来事にも目を向けていなければならない、と著者は日ごろから述べている。未曾有の災害であった震災が、まるで解決済とでも言うような空気が東北以外の全国に醸成されていく中、今なお続く問題や弱い立場にある被災者を忘れることをせず、そのような人々に向ける著者の目は優しい。

思えば古代においては、都から見れば東国は化外の地とも見なされていた。「日本」の周縁の地であった。しかし人が住む限りそこにはその文化文明が存在する。王城の鎮座する地だけが重要なのではない。全国を巡っている本書はそれを暗に伝えてくれているのではなからうか。そして自ら積極的に各地を訪れた著者はそれを感得しているのだらう。例えば二十二回、「海に浮かぶ戦争遺産」で

三重県神島の監的哨を訪ねた際の文章である。

島内の散策路をたどって行くと、突然、林の中からコンクリー
トの黒々とした廃墟が立ちあらわれる。旧日本軍の監的哨であ
る。戦時中、対岸の伊良湖岬から発射された砲弾がどこに着弾
するかを監察した場所である。三方の窓は窓枠さえもなく、大
きくぽっかりと海に向かって開いている。階段は薄暗く、狭い。
見るからに不気味で圧倒されそうだ。

このような文は、実際にその場所を訪れ、体感した人の書く文章
ではないだろうか。著者は作品の舞台となった地に自ら足を運んで
みよとしはば言われる。自らそれを実践する態度と文章であろう。
本書を読む方々にも様々な場所を訪れてもらいたいとの思いがあ
る。序文に、

ちよつと知らない土地に行つて見よう。

ちよつと知らない物語にふれて見よう。

それが本書のねらいである。

と記されるように、各回の末尾には紹介した地への経路を示す
「一口旅案内」が付されている。遠方へ旅をする折には本書を片手
に名所旧跡を訪れても良いし、「日本全国、美しい風景であふれて
いる。どこへ行つても素晴らしい景観や歴史と出会うことができ
る」と述べられるように、自らが住む所の近所にも訪れたことにな
い素晴らしい場所があるだろう。本書を読んで、ちよつとそこへ
寄つてみようとする気持ちが誘われれば、著者が本書に込めた思い
は報われることだろう。

(二〇一八年二月二〇日発行 四六判 二〇八頁 一六〇〇円＋
税 三省堂)

(ほんだ・いつろう 平成二十九年大学院博士後期課程(満期退学))